〔論　説〕

孔子の道徳哲学論

―四徳（仁，義，礼，知）論を中心として―

浅　井　茂　紀

目　次

Ⅰ　序　　論
Ⅱ　本　　論
　第１節　孔子の仁
　第２節　孔子の義
　第３節　孔子の礼
　第４節　孔子の知
　第５節　孔子のその他の徳
　　（１）孔子の信
　　（２）孔子の愛
Ⅲ　結　　論

I 序　論

論者は，「**孔子の道徳哲学論—四徳（仁，義，礼，知）論を中心として—**」と題して**論説**する。その目次は前記の如しである。そして，「孔子の道徳哲学論」（以下，この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと，且つ，カントの『純粋理性批判』での「哲学する」(philosophieren)[1]ことや異文化で，宗教上のイエス・キリスト（Jesus Christ）の「初めに，ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」（ヨハネの福音書，1—1)[2]，「この方は，初めに神とともにおられた。」（ヨハネの福音書，1—2)[3]や「しかし，わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し，迫害する者のために祈りなさい。」（マタイの福音書，5—44)[4]，とあるキリスト教の根本的原理である「愛」(agapê)，これらの認識や意識においても，この論文は，「孔子の道徳哲学論」と題して考察することも可能であろう。

論者は，「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」[5]，「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」[6]，「孟子の天道哲学論—孔子と孟子の天，天命と天道—」[7]

---

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865—A838, B866, S.752—753.
カント『純粋理性批判』（下）篠田英雄訳，岩波書店，昭和41年，128ページ，参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書，*The New Testament*』（英和対照）日本聖書刊行会，昭和52年，238ページ。
In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God. (John,1—1).

(3) 注(2)参照。ibid.,p.238. He was in the beginning with God. (John,1—2).

(4) 注(2)参照。ibid.,p.12. "But I say to you, love your enemies, and pray for those who persecute you; (Matthew,5—44).

(5) 拙稿「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」（論説）『千葉商大紀要』第41巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2003（平成15）年12月31日発行，21—37ページ。

(6) 拙稿「孟子の進退哲学論—平和活動のために—」（論説）『千葉商大紀要』第38巻第2・第3合併号，千葉商科大学国府台学会，2000（平成12）年12月31日発行，57—74ページ。

(7) 拙稿「孟子の天道哲学論—孔子と孟子の天，天命と天道—」（論説）『千葉商大紀要』第35巻第1号，千葉商科大学国府台学会，1997（平成9）年6月30日発行，23—41ページ，等。

などの論説でも，すでに儒教や儒学，孟子の哲学について多少なりともリサーチ（researches）を実践してきた。そこで，今回もそれらのシリーズ（series）として記述する。

特に，論者は，過去すでに発表した「孟子の道徳哲学論—四徳論を中心として—」[8]，と対照的に，同じ儒学においても比較哲学として，今回「孔子の道徳哲学論」としてみたわけである。また，孟子（Mencius，372—289B.C.）が，孔子（Confucius，552/551—479B.C.）に私淑したという観点からも哲学的意義があろう。

そこで，まず，最初に，

1．孔子の仁について，仁とは何かを問題にする。すでに当時，孔子の弟子である顔淵，仲弓，司馬牛や樊遅などが仁とは何かと，孔子に対して，質問しているが，弟子達への孔子の返答は各々相違がある。なぜ相違があるのか，仁の根本的な意義を思考してみる。

2．孔子の義について，義とは何かを問題にする。君子と小人における道理と経済的利益などの価値観の相違を比較することになろう。

3．孔子の礼について，礼とは何かを問題にする。孔子以前，中国古代の礼は，祭祀などの宗教的儀礼がある。いわば，形式的な礼の存在である。それに対して，孔子には，形式的な礼と心の礼の両方存在するが，礼の根本として，心の礼の場合を取り上げてみる。

4．孔子の知について，知とは何かを問題にする。孔子は，特に，知と不知との区別を重視する。西洋哲学では，ソクラテス（Sôkratês，470/469—399B.C.）は，「無知の知」[9]を出発点として真知への探求を実行した愛知者である[10]。この点でも，東洋哲学，中国哲学の孔子と西洋哲学，ギリシャ哲学のソクラテスとの相違点があると思われるのである。

5．孔子のその他の徳について，（1）孔子の信，（2）孔子の愛を問題にする。信や愛とは何か，如何なる意義があるかである。

---

(8) 拙稿「孟子の道徳哲学論—四徳論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第37巻第1号，千葉商科大学国府台学会，1999（平成11）年6月30日発行，223—240ページ。

(9) プラトン著『ソクラテスの弁明・クリトン』（久保勉訳），岩波書店，21ページ。

かくして，中国の春秋時代，聖人・孔子は，何故これら仁，義，礼，知，さらに，信や愛などの道徳哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の道徳哲学は，人間としての根本的な理念（Idee）ではなかろうかと，論者は考えるのである。

次に，Ⅱ　本論　第１節　孔子の仁から説明する。

Ⅱ　本　　論

第１節　孔子の仁

孔子の仁について，孔子の道徳哲学[11]における仁とは何かを問題にしてみる。すでに当時，師である孔子に対して，その弟子達は，仁とは何かと質問している。それは，なぜか，特に，『論語』顔淵第１２に集中している。

□□顔淵仁を問う。子曰く，己に克ちて禮に復するを仁と爲す。（顔淵１２），（傍点筆者）[12]。孔子に対して，顔淵が，仁とは何かと質問した。孔子は，「己に克ちて礼に復するを仁と爲す。」と答えて言った。つまり，孔子は，顔淵（顔回）の仁の質問に，自己の身勝手に打ち勝ち，最善の礼法を実践することが仁である，と答えているのである。

□□仲弓仁を問う。子曰く，門を出でては大賓（たいひん）を見るが如くし，民を使うには，大祭を承くるが如くす。己の欲せざる所は，人に施すこと勿れ。（顔淵

---

(10) 拙著『哲学要論』，高文堂出版社，2002（平成14）年４月１日発行，第３節ソクラテス，36ページ。

(11) 拙著『教育哲学要論』，高文堂出版社，2002（平成14）年４月１日発行，◇道徳教育の研究，96ページ。『津田左右吉全集』第16巻，岩波書店，昭和40年，２ページ。

(12) 顔淵問仁。子曰，克己復禮爲仁。一日克己復禮，天下歸仁焉。爲仁由己，而由人乎哉。（顔淵12），（傍点筆者）。顔淵は，名は回，字は淵。孔子の弟子中，徳行第一である。宋朱子（朱熹）集註『四書集註』香港太平書局，1964年，下論，巻６，顔淵，77ページ。宋朱子（朱熹）集注『四書集注』台湾中華書局，中華民國66年，論語，巻６，９ページ。慧豐學會『漢文大系』（一），新文豐出版公司，中華民國83年，論語集説，巻４，顔淵第12，12ページ。四部叢刊経部。『漢文大系』壹（大學説，中庸説，論語集説，孟子定本），冨山房，明治43年，論語集説，巻４，顔淵第12，27ページ。

１２)[13]。

仲弓が，仁とは何かと質問した。孔子が答えて言う，「家の門を出て世間の人と交際した場合は，あたかも高貴な来賓を迎えた時のように尊敬し，また，民を使う場合には，あたかも国家の祭典を執り行うように慎重でなければならない。自分がして欲しくないと思うようなことを，他人にしむけてはならない。」[14]。

□□司馬牛仁を問う。子曰く，仁者は其の言うや訒（じん）すと。（顔淵１２)[15]。

司馬牛が，仁とは何かと質問した。孔子は，「仁とは，言葉を口から出し渋る，すなわち，言葉を慎んで耐え忍ぶところにあるものだ。」[16]と答えて言った。

□□樊遲仁を問う。子曰く，人を愛すと。（顔淵１２)[17]。

樊遲が，仁とは何かと質問した。孔子は，「人を愛することだ。」と答えた。

従って，孔子の仁の概念であるが，このように，孔子は，弟子達の顔淵，仲弓，司馬牛や樊遲の各々４人の仁の質問に対して，各々相違した答えであり，内容が必ずしも一致していない。なぜであるか，問題になろう。この師弟間の問答の際の時間，空間的な場所や状況も考慮しなければならないであろうが，けれども，孔子は，弟子達の学識，人格や性格などを配慮して，それなりに，各人に最善の仁の意味について答えたと言えよう。

『論語』の仁の内容を全体的に勘案すれば，論者は，仁とは何か，というと「愛」だと考える。さらに，それは，「愛する」とか，「思いやり」とかの意味でもあろう。そのことは，「曾子曰く，夫子の道は忠恕のみ，と。」（里仁４)[18]，

と記載があるように，孔子先生の道は，忠，すなわち，誠実と恕，すなわち，思いやりだけである，ということからも言えるのではなかろうか，と論者は思うのであ

---

(13) 仲弓問仁。子曰，出門如見大賓，使民如承大祭。己所不欲，勿施於人。（顔淵12)。

(14) ところで，孔子の「己の欲せざる所は，人に施すこと勿れ。」（顔淵12，衛霊公15）と対照的に，キリスト教の黄金律として「人にしてもらいたいと思うことは何でも，あなたがたも人にしなさい。」(Therefore whatever you want others to do for you, do so for them;)（マタイの福音書，7—12）と言う言葉がある。注(2)参照。新改訳聖書刊行会，前掲書，16ページ。また，注(11)参照。拙著，前掲書（『教育哲学要論』），162ページ。

(15) 司馬牛問仁。子曰，仁者其言也訒。曰，其言也訒，斯謂之仁已乎。（顔淵12)。

(16) 吉田賢抗『論語』（新釈漢文大系，第１巻）明治書院，昭和35年，255ページ。

(17) 樊遲問仁。子曰，愛人。問知。子曰，知人。（顔淵12)。

(18) 子曰，參乎，吾道一以貫之。（中略)。曾子曰，夫子之道，忠恕而已矣。（里仁４)。

る。

また，儒学の開祖であり，聖人・孔子に私淑した儒教の正統派である亜聖・孟子も，「惻隠の心は，仁の端なり。」（公孫丑上）[19]，と記述している。

あわれみ痛む心，同情心を仁の端，萌芽としているのである[20]。

ゆえに，この節の孔子の仁では，孔子の仁は，「克己復礼」や「己の欲せざる所は，人に施すこと勿れ」とか，「言葉を慎んで耐え忍ぶ」や「人を愛す」，などの説明が記載されて存在するが，『論語』の仁の内容を全体的に斟酌すれば，根本的に「愛」の意義が，「思いやり」も内包して最善であろう。このように，孔子の道徳哲学としては，仁の徳に最高の価値を置いていると，論者は考えるのである。

第2節　孔子の義

孔子の義について，孔子の道徳哲学における義とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く，其の鬼に非ずして之を祭るは，諂（へつら）うなり。義を見て爲さざるは，勇無きなり。（為政２），（傍点筆者）[21]。

孔子が言う，祖先の霊以外を祭るのは何かを求める諂いである。義，すなわち，人間として良心的に為さねばならない正しいことを見て知りながら，それを為そうとしないのは，真の勇気がないものである[22]。つまり，孔子の義は，正義である。

□□子曰く，君子の天下に於けるや，適も無く，莫（ばく）も無し。義と與（とも）に比す。（里仁４）[23]。

孔子が言う，君子が天下の物事に処するに当たっては，適，すなわち，主に固執するところもなく，又，莫，すなわち，断固としてこうしなければと苦しむこともない。ただ正しい道筋にしたがって義の宜しきにかなうのみである。つまり，道義が大切である。

---

(19) 惻隱之心，仁之端也。羞惡之心，義之端也。辭讓之心，禮之端也。是非之心，智之端也。人之有是四端也，猶其有四體也。（公孫丑上），（傍点筆者）。

(20) 注(5)参照。前掲論文（拙稿「孟子の良心哲学論」），28ページ。

(21) 子曰，非其鬼而祭之，諂也。見義不爲，無勇也。（為政２）。

(22) 注(16)参照。吉田賢抗，前掲書，57ページ。

(23) 子曰，君子之於天下也，無適也，無莫也。義之與比。（里仁４）。

□□子曰く，君子は義に喩（さと）り，小人は利に喩る。(里仁４)[24]。

孔子が言う，君子は物事に対して，すぐ道義を基準にして悟るが，小人は万事に対して，すぐ利益になるかどうかというように理解するものである。

□□子曰く，君子は義以て質と爲し，禮以て之を行い，孫以て之を出（い）だし，信以て之を成す。君子なるかな。(衛霊公１５)[25]。

孔子が言う，君子の本質は，すべて宜しきに適うという義である。正しい礼義でこの義を実行し，孫，すなわち，謙遜的な言葉で義を口に出し，信，すなわち，まことを以て義を完成させる。これでこそ君子である。

君子の本質は，万事適宜を得る義が根本である。礼義や礼儀にかなった行為，謙虚な言葉による義，信義により完成される，ということであろう。

□□子曰く，君子は義以て上と爲す。君子勇有りて義無ければ，亂（らん）を爲す。小人勇有りて義無ければ，盗を爲す，と。(陽貨１７)[26]。

孔子の弟子，子路の「君子は，勇を尚びますか」という質問に対して，孔子が，「君子は，勇を尊ぶが，勇よりも義を尊ぶ。君子に勇だけあって，義がないと，道理を乱す。また，小人に勇だけあって，義がないと，欲望的に盗みをするようになる。」と答えている。

なお，孔子に親炙ではなく私淑した孟子[27]の義は，羞悪の心でもある。

「羞悪の心は，義の端なり。」(公孫丑上)[28]。

ゆえに，この節における孔子の義では，孔子の義は，正義である。さらに，道義や適宜，礼義や礼儀，信義などの意義である。君子は，義や勇を尊ぶが，反対に，小人は，利益に執着する。このように，孔子の道徳哲学としては，義の徳に価値を置いていると，論者は考えるのである。

次に，第３節　孔子の礼について説明する。

---

(24) 子曰，君子喩於義，小人喩於利。(里仁４)。

(25) 子曰，君子義以爲質，禮以行之，孫以出之，信以成之，君子哉。(衛霊公15)。

(26) 子路曰，君子尚勇乎。子曰，君子義以爲上。君子有勇而無義，爲亂。小人有勇而無義，爲盗。(陽貨17)。

(27) 拙稿「孟子の略伝について―経歴と哲学―」(論説)『千葉商大紀要』第36巻第３号，千葉商科大学国府台学会，1998（平成10）年12月30日発行，55ページ。

(28) 注(19)参照。

第３節　孔子の礼

孔子の礼について，孔子の道徳哲学における礼とは何かを問題にしてみる。

『論語』の中で，林放という人が，孔子に対して，礼の根本について質問している。

□□林放禮（れい）の本を問う。子曰く，大なる哉（かな）問や。禮は其の奢（しゃ）ならんよりは寧（むしろ）儉せよ。喪は其の易（い）ならんよりは寧戚せよ，と。（八佾［はちいつ］３），（傍点筆者）[29]。

林放が礼の根本を質問した。孔子が答えて言う，「それは重大な質問である。礼はその派手に華やかにするよりは，むしろ倹約して，控えめにせよ。喪中はその易，すなわち，儀式が整うよりは，むしろ戚，すなわち，哀悼のいたみ悲しむ心が大切である」，と[30]。孔子は，礼の根本について，礼は，派手よりも，控えめが善く，喪中では，儀式よりも悲しむ心が大切であるとする。形式よりも，内容的に誠心誠意，誠実を重要視している。

□□子曰く，生けるには之に事えるに禮を以てし，死せるには之を葬るに禮を以てし，之を祭るに禮を以てす。（為政２）[31]。

孔子が言う，「親の生きている時は，身分相応な礼で以て親につかえ，親が死亡したら，礼で以て葬儀をして，親の年忌の祭りも礼で以て実施する。」と。

ともかく，親に対しては，生きている時も，葬儀も，死後も，身分相応の礼節や礼法で行為することが大事であるということであろう。

□□顔淵仁を問う。子曰く，己に克ちて禮に復するを仁と爲す。（顔淵１２）[32]。

孔子は言う。自己の身勝手に打ち勝ち，最善の礼法を実践することが仁である。

□□子曰く，君子は博く文を學び，之を約するに禮を以てせば，亦以て畔（そむ）かざる可きか。（雍也６）[33]。この節は，顔淵第１２にも多少似た文章あり。

---

(29) 林放問禮之本。子曰，大哉問。禮與其奢也寧儉。喪與其易也寧戚。（八佾［はちいつ］３）。

(30) 注(16)参照。吉田賢抗，前掲書，62ページ。

(31) 子曰，生事之以禮，死葬之以禮，祭之以禮。（為政２）。

(32) 注(12)参照。

孔子が言う，君子や学者は，幅のひろい学問をして教養を豊かにし，これを集約して実行するのに，礼，すなわち，正しい生活様式や規範を規準としていくなら，また，道にそむかない立派なものということができる。

□□子曰く，麻冕（まべん）は禮なり。今や純なるは儉なり。(子罕９)[34]。

孔子が言う，麻の冠が古来からの正式の礼儀である。

□□子曰く，禮と云い，禮と云う，玉帛を云はんや。(陽貨１７)[35]。

礼，礼とよく言うがそれは礼物用の玉とか帛，すなわち，絹布の善し悪しや数量をいうのであろうか。そうではなく，礼の根本は，心からの尊敬にある。

従って，『論語』の中の礼の概念は，個々に意義があっても全体のまとまりが明確でないと言えよう。但，仁と礼は車の両輪と同一視されよう。孔子の礼は，形式よりも心を基本としている。

孟子では，「辞譲の心は，禮の端なり。」(公孫丑上)[36]や「恭敬の心は，禮なり。」(告子上)[37]である。

ゆえに，孔子は，礼の根本について，礼は，派手よりも，控えめが善く，喪中では，儀式よりも悲しむ心が大切であると，形式よりも，内容的に誠実な心を重視している。親には，生前，葬儀や死後も礼節が大事である。さらに，最善の礼法を実践して，博学で正しい生活様式を守る。形式や物よりも誠実な心からの尊敬などに礼の根幹があると言える。このように，孔子の道徳哲学は，礼の徳に価値を置いていると，論者は考えるのである。

第４節　孔子の知

孔子の知について，孔子の道徳哲学における知とは何かを問題にしてみる。

---

(33) 子曰，君子博學於文，約之以禮，亦可以弗畔矣夫。(雍也６)。
これは，次の顔淵第12（294）にも多少似た文章が存在する。
子曰，博學於文，約之以禮，亦可以弗畔矣夫。(顔淵12)。

(34) 子曰，麻冕禮也。今也純儉。(子罕９)。

(35) 子曰，禮云，禮云，玉帛云乎哉。(陽貨17)。

(36) 注(19)参照。

(37) 惻隱之心，仁也。羞惡之心，義也。恭敬之心，禮也。是非之心，智也。(告子上)。

□□人知らざるも慍（うら）みず，亦君子ならずや。（学而１），（傍点筆者）[38]。

孔子は，「他人が自分の学識や人格を知ってくれなくても，不平や不満をもたない人は，なんと真実の君子ではないか。」と述べている。ここでの人とは，世の人，他人であるが，孔子においては，自分を採用してくれない君主や王侯などを暗示していると言えよう。

次に，孔子は，知と不知との相違について述べている。

□□子曰く，由（ゆう），女（なんじ）に之を知るを晦（おし）えんか。之を知るを之を知ると爲し，知らざるを知らずと爲せ。是れ知るなり。（為政２），（傍点筆者）[39]。

孔子が子路に言う，由よ，あなたに物事を知るということを教えようか。自分の知っていることは知っているとし，知らないことは知らないと，心に区別する。これが本当に知ることだ。ここの原典では，「教」の漢字では無く，この「晦」の漢字，すなわち，あきらかにおしえるとか，さとしおしえる意味で使用されている。つまり，孔子の知は，知と不知を心に明確に区別することが知というわけである。

これは，西洋哲学におけるギリシャの哲人・ソクラテスの「無知の知」（wisdom of ignorance）[40]とは相違がある。さらに，

□□樊遲仁を問う。子曰く，人を愛すと。知を問う。子曰く，人を知ると。（顔淵１２），（傍点筆者）[41]。樊遲が孔子に知を質問した。孔子は，知とは人を知ることだと答えている。並びに，

□□樊遲知を問う。子曰く，民の義を務め，鬼神を敬して之を遠ざく，知と謂う可し。（雍也６）[42]。樊遲が知について質問した。孔子は，「人間としての義務的行為を実践して，鬼神，すなわち，霊や神は崇敬するが，近づき慣れないで敬遠するのが，知というのである。」と言う。度々，樊遲の知の質問に対して，孔子の答えに各々相違がある。また，

---

(38) 子曰，學而時習之，不亦説乎。有朋自遠方來，不亦樂乎。人不知而不慍，不亦君子乎。（学而１），（傍点筆者）。

(39) 子曰，由，誨女知之乎。知之爲知之，不知爲不知。是知也。（為政２）。

(40) 注(10)参照。拙著，前掲書（『哲学要論』），36ページ。

(41) 注(17)参照。樊遲問仁。子曰，愛人。問知。子曰，知人。（顔淵12），（傍点筆者）。

(42) 樊遲問知。子曰，務民之義，敬鬼神而遠之。可謂知矣。（雍也６）。

□□孔子曰く，生まれながらにして之を知る者は上なり。學びて之を知る者は次なり。困（くるし）みて之を學ぶは又其の次なり。困みても學ばざるは，民斯（こ）れを下と爲す，と。(季氏１６)[43]。孔子は，生まれつき道理を知る者は最上である。後で，学問して道理を知る者はその次に価値が存在するなどと考慮している。

次に，「温故知新」と天命などについて，

□□子曰く，故きを温めて新しきを知れば，以て師爲る可し。(為政２)[44]。

□□五十にして天命を知る。(為政２)[45]。孔子は，五十歳で天命を知ったのである。

□□子曰く，知者は水を樂しみ，仁者は山を樂しむ。知者は動き，仁者は静かなり。知者は樂しみ，仁者は壽（いのちなが）し。(雍也６)[46]。孔子は，仁者は山を楽しみ，山の如く静かで，長寿なのに対して，対照的に，知者は水を楽しみ，水の如く動き，変化の中で楽しみが尽きないとする。次に，孟子の智については，

「是非の心は，智の端なり。」(公孫丑上)[47]である。孟子の智は，是非の心でもある。

ゆえに，孔子の知では，知と不知を区別することが知である。さらに，知は人を知ることであり，人間の義務的行為を実践し神霊を敬遠する。生まれつき道理を知る者は最上であるが，後で学問して道理を知る者も価値がある。「温故知新」は師たる必要条件でもあり，孔子は，五十歳で天命を知った。知者は水を楽しみ，水の如く動き，変化の中で楽しみが尽きないなどの意義があり，孔子の道徳哲学は，知の徳に価値を置くと論者は考える。

第５節　孔子のその他の徳，（１）孔子の信，（２）孔子の愛

最初に，孔子の信について，孔子の道徳哲学における信とは何かを問題にしてみ

---

(43) 孔子曰，生而知之者上也。學而知之者次也。困而學之又其次也。困而不學，民斯爲下矣。(季氏16)，(傍点筆者)。

(44) 子曰，温故而知新，可以爲師矣（為政２)。

(45) 五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲，不踰矩。(為政２)。

(46) 子曰，知者樂水，仁者樂山。知者動，仁者靜。知者樂，仁者壽。(雍也６)。また，拙著『哲学の原理―実在と認識―』(改訂版)，高文堂出版社，1987（昭和62）年７月７日，248ページ。

(47) 注(19)参照。また，注(37)参照。

る。

（1）孔子の信

□□子曰く，千乘の國を道（おさ）めるに，事を敬して信，用を節して人を愛し，民を使うに時を以てす。（学而１），（傍点筆者）[48]。

孔子が言う。大国を治めるには，政治の万事を慎重に行って民の信頼や信用を受け，国家の経済的費用は節約や節度をもって民を心から愛する。民を使う場合には農耕の農閑期などの時期を配慮する必要がある。

□□子四を以て教える。文・行・忠・信。（述而７）[49]。

孔子は，四つの講義要目で門人を教育した。古典の講義，徳行の実践，誠実，人を欺かない信義やまことである。

□□子貢政を問う。子曰く，食を足し，兵を足し，民之を信にすと。（中略）。民信無くば立たず。（顔淵１２）[50]。

世の人に信義がなかったならば，国家の政策は安全に成立しない。政治家においては，道徳上，約束を守り務めを果たす信義は根幹で有るという事である。

□□信以て之を成す。君子なるかな。（衛霊公１５）[51]。さらに，孟子の信について，「父子親有り，君臣義有り，夫婦別有り，長幼序有り，朋友信有り。」（滕［とう］文公上）[52]。孟子は，朋友間には信，まことがあるとする。

次に，孔子の愛について，

（2）孔子の愛

□□子曰く，弟子入りては則ち孝，出でては則ち弟，謹みて信，汎く衆を愛して仁に親しみ，行いて餘力有らば，則ち以て文を學ぶ。（学而１），（傍点筆者）[53]。

---

(48) 子曰，道千乘之國，敬事而信，節用而愛人，使民以時。（学而１）。

(49) 子以四教。文・行・忠・信。（述而７）。

(50) 子貢問政。子曰，足食，足兵，民信之矣。子貢曰，必不得已而去，於斯三者何先。曰，去兵。子貢曰，必不得已而去，於斯二者何先。曰，去食。自古皆有死。民無信不立。（顔淵12），（傍点筆者）。

(51) 注(25)参照。

(52) 父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。（滕［とう］文公上），（傍点筆者）。さらに，拙稿「孟子の人倫哲学論―五倫について―」（論説）『千葉商大紀要』第32巻第３号，千葉商科大学国府台学会，1994（平成６）年12月30日発行，1―19ページ。

(53) 子曰，弟子入則孝。出則弟，謹而信，汎愛衆而親仁，行有餘力，則以學文。（学而１）。

孔子が言う。若者達は，家庭内で父母に孝行，世間では目上におとなしく，慎んで行為して言葉に信実があるようにする。広く人を愛すべきだが，仁徳の人に親しみ善い影響を受ける。実行に余力があれば，文を学び教養を高めることが肝心要である。

□□樊遲仁を問う。子曰く，人を愛すと。（顔淵１２）[54]。樊遲が，仁（benevolence）[55]とは何かと孔子に質問した。孔子が言う。人を愛することだと。

愛には，物や人を愛する場合があるが，この仁の意義は，人を愛することである。

□□子曰く，之を愛しては，能く勞すること勿（な）からんや。（憲問１４）[56]。

孔子が言う。人が本当に人を愛するならば，その人を立派にするために，その人を苦労させないでおれようか，おれない。時に，逆境の試練も大事ということである。

□□曰く，君子道を學べば，則ち人を愛す。云々。（陽貨１７）[57]。

子游が，「昔，孔子先生から承った話に，君子が道を学べば，自然に民を愛するようになる。云々。」と，孔子の面前で答えて言う。子游は，魯の武城の宰，即ち，長官である。

□□子曰く，賜や，爾は其の羊を愛（お）しむ。我は其の禮を愛しむと。（八佾［はちいつ］３）[58]。賜は子貢の名。孔子の愛には，おしむという意味もある。

さらに，孟子の愛については，

「仁者は，人を愛し，禮有る者は人を敬す。」（離婁下）[59]。仁者は人を愛する。

ゆえに，孔子のその他の徳，（１）孔子の信，（２）孔子の愛では，最初に，

---

(54) 注(17)参照。

(55) James Legge,*THE CHINESE CLASSICS*, CONFUCIAN ANALECTS,THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIUS, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.260. レッグは，この書（*THE CHINESE CLASSICS*）で，『論語』（CONFUCIAN ANALECTS）における仁は，benevolenceや，perfect virtue，義は，right，礼は，propriety，知は，knowledge，などと訳している。
さらに，信は，sincerity，truthfulnessや，faith，愛は，love，などと訳している。

(56) 子曰，愛之，能勿勞乎。（憲問14），（傍点筆者）。

(57) 曰，君子學道，則愛人，小人學道，則易使也。（陽貨17）。

(58) 子曰，賜也，爾愛其羊。我愛其禮。（八佾［はちいつ］３）。
賜とは，子貢の名前である。従って，爾（なんじ）とは，子貢を言う。

(59) 孟子曰，君子所以異於人者，以其存心也。君子以仁存心，以禮存心。仁者愛人，有禮者敬人。愛人者，人恆愛之，敬人者，人恆敬之。（離婁下），（傍点筆者）。

（1）孔子の信は，信頼や信用，信義や信実，まことなどの意義である。（2）孔子の愛は，人を愛することであり，民を愛することなどである。また，羊を愛しむといった，おしむの意味も存在する。仁と愛とは関連して，信実や真実の仁愛が重要である。孔子の道徳哲学は，信と愛にも価値を是認していると，論者は考えるのである。

Ⅲ　結　　論［孔子の道徳哲学論―四徳（仁，義，礼，知）論を中心として―］

［1］**孔子の仁**では，孔子の仁は，「克己復礼」や「己の欲せざる所は，人に施すこと勿れ」とか，「言葉を慎んで耐え忍ぶ」や「人を愛す」，などの説明が記載されて存在するが，『論語』の仁の内容を全体的に斟酌すれば，根本的に「愛」の意義が，「思いやり」も内包して最善であろう。このように，聖人・孔子は，道徳哲学（moral philosophy）として，仁の徳に最高の価値を置いていると，論者は考えるのである。

［2］**孔子の義**では，孔子の義は，正義である。さらに，道義や適宜，礼義や礼儀，信義などの意義である。君子は，義や勇を尊ぶ。孔子の道徳哲学としては，義の徳に価値を置くのである。

［3］**孔子の礼**では，孔子は，礼の根本について，礼は，派手よりも，控えめが善く，喪中では，儀式よりも悲しむ心が大切であると，形式よりも内容的に誠実な心を重要視している。親には，生前，葬儀や死後も礼節が大事である。最善の礼法を実践して，博学で正しい生活様式を守る。形式や物よりも誠実な心からの尊敬に礼の根幹があるとする。このように，孔子の道徳哲学は，礼の徳に価値を置いていると，論者は考えるのである。

［4］**孔子の知**では，知と不知を区別することが知である。さらに，知は人を知ることであり，人間の義務的行為を実践して神霊を敬遠する。生まれつき道理を知る者は最上であるが，後で学問して道理を知る者も存在価値がある。「温故知新」は師たる必要条件でもあり，孔子は，五十歳で天命を知った。知者は水を楽しみ，水の如く動き，変化の中で楽しみが尽きないなどの意義があり，孔子の道徳哲学は，知の徳に価値を置くのである。

［5］**孔子のその他の徳**，（1）**孔子の信**，（2）**孔子の愛**では，最初に，

（1）孔子の信は，信頼や信用，信義や信実，まことなどの意義である。次に，

（2）孔子の愛は，人を愛することであり，民を愛することなどである。また，羊を愛（お）しむの意味も存在する。孔子の仁と愛は関連して，信実や真実の仁愛が重要である。孔子の道徳哲学は，信と愛にも価値を是認しているのである。なぜ孔子は，仁，義，礼，知，さらに，信や愛などの道徳を主張したのかが問題である。それは古代中国，春秋時代の状況とも関連して，聖人・孔子の偉大な人格などに基づく。特に，春秋時代は，迫り来る戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり，孔子は，周公旦を理想として，

□□吾復夢に周公を見ず。（述而７）[60]，と嘆いた如く，政治的に善き国家建設を願望していたゆえ，これら仁，義，礼，知，また，信や愛などの孔子の道徳哲学は，人間としての根本的な理念（Idee）であり，眼目であったと，論者は思うのである。

さらに，論者のこの論文，「**孔子の道徳哲学論**」では，ロゴス（logos）的に体系化（systematization）して，その中身を「哲学する」（philosophieren）[61]事を試みた。

よって，このような内容により，論者の「**孔子の道徳哲学論—四徳（仁，義，礼，知）論を中心として**—」［Confucius'Philosophical Theory of Morality—Attaching Importance to His Theory of the Four Virtues (Benevolence, Right, Propriety, Knowledge)—］の**論説**は，過去，現在，未来の三世に及んで，多少なりとも意義と価値があろうかと，論者は考えるのである。

……｛２００４（平成１６）年８月５日（木曜日），原稿提出｝……

---

(60) 子曰，甚矣，吾衰也。久矣，吾不復夢見周公。（述而７），（傍点筆者）。

(61) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op. cit.*,A837, B865—A838, B866, S.752—753.
カントの哲学については，注(10)参照。拙著，前掲書（『哲学要論』），第２章イギリス経験論とカントの哲学，136ページ。
さらに，カントの道徳哲学，特に，善意志（guter Wille）については，カント著『道徳形而上学原論』（Immanuel Kant:*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg. 1965, 393, S.10.），篠田英雄訳，岩波書店，2001年，22ページ。また，パスカル（Blaise Pascal,1623-1662）は，『パンセ』で，人間は，「考える葦」として，よく考えて努力する必要があり，そこに「道徳の原理」がある，と強調している。注(11)参照。拙著，前掲書（『教育哲学要論』），7. パスカル（Pascal）における「道徳の原理」，151ページ，等々。